



町の分断から もう2年

子どもたちに核のゴミのない寿都を！町民の会 広報紙 2022年12月号（No.45）

原子力資料情報室 高野聡さんからのご挨拶

寿都町のみなさん。私は原子力資料情報室という市民団体に活動する高野聡と申します。高木仁三郎市民科学基金という財団の研究助成を得て、10月下旬と11月初頭に寿都を訪れました。町民の会のみなさんにインタビューして、どのような思いで活動しているのか深く知ることが目的でした。インタビュー内容を簡潔に紹介します。



1. 自らの信念と将来世代への責任

インタビューで感じたことは2つありました。1つ目は、一個人としての信念や倫理観を大切に、将来世代の人々のために責任を果たそうという価値観でした。住民の合意のないまま、文献調査が進む不条理を許さず、「ダメなものはダメとはっきり言う」という力強い行動原理を持っていました。町長の判断や権限のみで応募できる現在の行政制度によって、町民が振り回されてしまった事態を何とか收拾しようと自力で動く強い意志と覚悟が感じられました。

子供や将来世代のために、今の美しい寿都を残したいという思いも共通していました。核のゴミの処分場が来たら、町の風景は大きく変わってしまう。町のイメージも、「おいしいシラスやカキの食べられる町」から「核のゴミのある町」に変わってしまう。北海道の中では長い歴史のある町であり、海を中心とした営みとそこから育まれた

独自の文化や先祖代々語り継がれてきた豊かな民俗誌も傷ついてしまう。核ゴミの話が持ち上がったのに、何も行動しなかったら子供たちに何と説明できるのか。子供たちに恥ずかしくない自分でいたい。誇りある寿都を守り、子々孫々受け継いでいくことへの矜持と責任感が、みなさんの言葉からひしひしと伝わってきました。

かといって、町民の会の皆さんには、自分たちの信条を絶対視し、他人に押し付けようとする傲慢さはありませんでした。比較的しがらみの少ない自分たちは声を上げているが、しがらみの中で悶々とした思いを外に吐き出すことすらできない住民はもっと辛いかもしれない。そのような人に代わって声を上げる、そのような人のためにもできる限りのことをする。同じ共同体に住む者としてのおおらかな思いやりが、お話の節々に込められていました。町民の会のみなさんの労（いたわ）りとしなやかさが、分断により凝り固まった

住民の心をゆっくり、温かくほぐしていくことを願ってやみません。

2. 町民主体の持続可能な町づくりへの思い

インタビューで感じたことの2つ目は、町づくりへの思いです。町民主体で地域資源を発掘していくことの大切さと、交付金頼りにならない持続可能な地域社会を強調していたことも印象的でした。翻って交付金を口実に寿都の町づくりに介入しようとするNUMOの思惑に対する強い不信も感じられました。また手当たり次第に補助金を引っ張ってくるが、経営感覚のない事業投資を繰り返し、失敗続きの町政に対する不満も多くの人が口にしました。総合的な町づくりのビジョンがない現状を変え、町民主体で町づくりをしたいという住民自治の精神が溢れていました。

例えば、寿都は漁業が盛んなものの、まだまだ加工業に工夫の余地があるといいます。新たな冷凍技術を導入すれば、寿都の水産物を新鮮により長い期間、観光客に楽しんでもらえる潜在力があるのだそうです。地域の歴史・文化的資源の掘り起こしもまだまだ十分可能だとのこと。1600年頃から和人が住み、北海道の中では歴史がある寿都。その地域資源をみんなで調査し、発掘する作業を以前から行っているそうです。その取り組みの成果の一つが、旧鯉御殿の橋本家。丁寧な修復作業で屋敷はよみがえり、その土蔵を改修した「そば処鯉御殿・昌の屋」が2020年にリニュー

アル・オープン。私もそこで寿都産のノリの入った蕎麦を食しました。そのおいしさに舌鼓を打ちつつ、寿都の歴史も感じられる贅沢な時空間が強く記憶に残っています。歴史・文化・自然の資源の宝庫でありながら、開拓途上の寿都町には、秘められた魅力がまだまだあると感じました。

3. 後世に本当に残したい町を目指した先には…

インタビューで印象に残った2つの要素は、実は絡み合っています。つまり子供たちや後世への責任として、魅力ある町づくりを町民主体で行うことです。この思いは文献調査賛成派の方とも共有できると思います。町民の会のみなさんも口々に、賛成派とも話し合いたいと言っていました。

寿都町の主役は、町長でも NUMO でもなく、町民1人1人です。文献調査の賛否を問わず、町民がみんな、主体的にアイデアを出しながら、持続可能な町づくりを目指して議論を積み重ねていけば、「核のゴミ」という選択肢はなくなっていくに違いありません。寿都の外にいる人たちは、そのような未来が来るように、知識や経験、ネットワークを提供することで、町民の会と連携できるのではないかと思います。

最後に、また寿都にお邪魔するときにはインタビューを受けてくださる方を探しています。文献調査の賛否は問いません。話してもよいという方、私のメールアドレスまで連絡をください。よろしく願いいたします。 takano@cnic.jp



高野聡 (たかのさとし)

1979年生まれ。神奈川県出身。2010年から11年間、韓国で暮らしながら脱原発運動に参加、大学院でエネルギー政策について学ぶ。2021年末、日本に帰国。2022年2月から原子力資料情報室で活動。4月、経済産業省の審議会である放射性廃棄物ワーキンググループの委員に就任。



感想報告 六ヶ所村原子燃料サイクル施設を視察

役場と NUMO が事務局の「町の将来に向けた勉強会（以下勉強会）」の一環で、11月12日～13日、17～18日に、2つの班が六ヶ所村に本社を置く「日本原燃株式会社（以下原燃）」の「原子燃料サイクル施設」を視察しました。端的に言えば、原発で燃やした核燃料を加工し、再び原発で燃やすための中核施設です。その過程で製造されるのが「ガラス固化体（高レベル放射性廃棄物＝“核のごみ”）」であり、人間がすぐそばに立てば、短時間で死に至る極めて危険な廃棄物です。日本原燃は1993年にこの工場の建設に着手しましたが、26回の竣工延期を重ねて、いまだに完成していません。総額16.8兆円にのぼるこの事業、費用は電気料金に含まれていますが、原発を持たない新電力に移った消費者も送電線の利用料に上乗せして2.7兆円を負担してきました（2020年9月末まで）*1。

勉強会のメンバーは、「高レベル放射性廃棄物貯蔵管理センター」の核心部で原燃職員でも一部の人間しか出入りできない区域への視察が特別に認められました。ガラス固化体を地下に格納した蓋の上に立って集合写真を撮れるほど、「施設環境下」では“核のごみ”が安全に保存されていました。ただ、「遮蔽プラグをクレーンで明けたら、直ちに線量計が振り切れて終わりです」とその場で言われたため、「危険なものをいかに安全に管理するか」という本質が実感できました。本当に地層処分して10万年も放射性物質漏れから人類を守ることができるのか…。



日本原燃職員による企業説明

そのほか、この再処理施設が建設当初から指摘されていた危険性については、かなりの対策をしてあり、過酷事故が起こっても周囲5kmの住民の避難対策で良いことになっていることも説明されました（ただ、時間がない中での口頭説明。）

しかし、この前日に訪れたある六ヶ所村の施設にて出会った方にこんな話を聞きました。東日本大震災の際、再処理施設の使用済み核燃料プールから水が溢れ、管理に当たっていた原燃職員からこの事象を聞いたこの方は「60km以北に子供と職員たちを連れてすぐに逃げられるように何分かかかるか繰り返し訓練した。水素爆発したら終わりだ」と言うのです。長年住んでいるその方でも、思わぬトラブルを聞いて危機意識を持ったということに改めて考えると、今回のような特別待遇での施設説明を私たちだけが受けていいのだろうか、というモヤモヤが残る視察となりました。今回の特別視察を手配してくれた方々には感謝をします。なお、この視察で得た情報はより詳しく整理したうえで今後報告します。

*1 松久保肇（2020）「原発の使用済み燃料再処理と電気の託送料金」 2022年11月20日閲覧

https://www.greenpeople.co.jp/wpcontent/uploads/2020/06/20200602_GPP-saishori%E3%83%BCtakuso.pdf



日本原燃配布資料より。この床の蓋と遮蔽プラグの下に核のごみがある。

勉強会
を開催

高レベル放射性廃棄物処分の現状・課題

11月18日(金)、寿都にお越しいただいた龍谷大学政策学部教授の大島堅一さんと一橋大学大学院経済学研究科准教授の山下英俊さんに、原子力発電・高レベル放射性廃棄物処分の現状・課題や他国の状況についてお話を伺いました。

大島先生には、衰退する原発産業の現状や、このまま進むと仮定した場合の最終処分の具体的な流れなどをお話いただきました。

放射能濃度の極めて低い放射性廃棄物の一部でさえも、まだ審査中の段階で実際の埋設は始まっていないことなど、「そうだったの?」と思う内容も多くありました。高レベル放射性廃棄物よりも危険度の低いものでも処分に苦労している今の段階で、寿都で語られている地層処分の安全性をどうやって現実味を持って聞けばいいのかと思ってしまう。

また、山下先生にお話しいただいたドイツで進められている最終処分地の選定プロセスは、想像していたものと違って驚きました。ドイツでは、科学的な根拠なく選定された候補地が上手くいかず、処分地選定のための法律を作り直し、長期的な専門家と市民の協働による処分地選定を

進行しています。そこでは公正・透明なやりとりのもと処分地選定のプロセスが進められているようで、住民の気持ちに寄り添った仕組みづくり・考え方には、日本も寿都も学ぶべき点が多いのではと感じました。理解が追いついていないと言われる寿都町民の立場に立って、学びやすい・学ぼうと自発的に思える場をこれから提供してもらいたいです。

そして、最後に大島先生が話した「地域住民の役割は、地域のために自ら学び、地域の在り方を話し合い、地域の今と将来を決めること。」という言葉が、今の寿都にとってすごく大事なことだと思いました。

今回の勉強会には、賛成・反対の隔てなく、町民の会以外の方にも参加していただきました。町の将来のために知識を蓄え、疑問や不安を解消していくことに賛成派も反対派もありません。同じ意見ばかりの中で話すのではなく、こういう機会が少しずつ増えていけばいいと思いました。

チラシ配布について

町民の会のチラシは、配布ボランティアの皆さんのおかげで、ふたたび全戸配布が可能になりました。配布ボランティアの皆様にお礼申し上げます。また、引き続き、配布ボランティアを募集しております。チラシは美容室ミリアン、ペンションメロー、吉野商店など町内数ヶ所で配布もしております。事務局にご連絡いただければ、お渡しできます。



子どもたちに核のゴミのない寿都を！町民の会

事務局 048-0401 寿都郡寿都町字新栄町 101-6

TEL/FAX : 0136-62-3630 kakugomino@gmail.com

HP : <http://kakugomi.no.coocan.jp/>

FB : <https://www.facebook.com/106569234530018/>

北海道銀行寿都支店(店番号 304)普通 0481374

ゆうちょ銀行 記号:19070 番号:44246811



2022年12月号 (No.45)